

# 願牛寺報

GWANGYUJI-HOU

浄土真宗本願寺派茨城西組 大高山證誠院 願牛寺 No.5



2017  
春彼岸





# 浄土真宗の教えに どうしたら出会えるか

仏教というと、『葬式仏教』

という言葉があるように「死んだらお世話になるもの」くらいに考えている人が多いのではないだろうか。確かに、今の日本の状況からいえば、死者のための仏教になっていくように思われます。

しかし、仏教とは、生きている私たちが、苦しみのない人生を送るためにどうしたらいいのか、そのための答えとしてだされたお釈迦さまの教えです。決して、死者のための教えではありません。生きている私たちに必要な教えなのです。

生きているうちにその教えに出会い、私たちの今の生き方（迷い）を変えて、苦しみのない人生を送るようにしな

ければ、お釈迦さまの折角の教えを役立てたことにはなりません。

けれども「聞いたことのない言葉や漢字ばかりで分からない」、「仏教は難しい」、「特に浄土真宗は難しい」というお話を聞きます。確かに、仏教のなかでも、浄土真宗の教えは特徴のある教えです。今回は難しいといわれる真宗について説明したいと思えます。

## 「行」としてはやさしい

他の仏教の宗派は、戒律をきちんと守り修行をするのに対し、浄土真宗はそのようなことを重要視していません。私たちは「行（さとり）を得るために成すべきこと」とし

て阿弥陀如来の名である念仏（すなわち南無阿弥陀仏）を称えることだけです。

ここを鍛え、よくいわれるような煩惱（身体や心を悩ます一切の欲望）を除くために、集中的な修行や瞑想など特別の修行は必要としていません。ごく普通の生活をしながら、教えを学び（聴聞）、念仏を称えながら、自分の行動が煩惱にまみれ、自己中心的になっていくということに少しずつ気づいていく。そして「気がつく前の自分の生き方は迷いであった」と目覚めていく生活することなのです。目覚めたあとの生活には、人生のさまざまな苦を乗り越えていける喜びがあります。このようにして目覚めた状

態を、さとりを得る身となるといえます。こうした人は、修行者ではなく、念仏者といえます。

お釈迦さまの時代からも念仏という「行」はありました。が、さとりをひらくのには、修行をして戒律を守るという方法が主でした。しかし、それができるのは、出家者などごく一部の人に限られていて、一般的な庶民にはできないこととです。

お釈迦さまが仏教を説かれたのは、「生きているもの、苦しんでいるものを皆平等にすくいたい」という願いにありましたので、一般的な庶民でもできる方法を多くの教典の中からインドや中国、そして日本の高僧らが探しました。その結果、見出されたのが念仏の教えでした。

念仏を称えるだけでさとりが得られるということは、お釈迦さまが説かれた『仏説無量寿経（阿弥陀如来の願い）』というお経にあります。ここでは、法蔵菩薩という修行者

がさとりをひらくために四十八の願を立てるのですが、そのなかの第十八番目の願い（本願といえます）が「南無阿弥陀仏と称えたものをさとりの国（すなわち浄土）に生まれさせる。生まれなければ、自分はさとりをひらかない」という阿弥陀如来の願いです。法蔵菩薩は、この願いが成就し、阿弥陀如来になられました。念仏を称えれば、称えたものがさとりの国にうまれるというのです。



親鸞聖人は、師匠の法然聖人からこの教えを学び、比較山での修行者の身を捨て、この教えに順じて生きる道を選ばれました。そして、「行」のなかでも、念仏の「行」は優れている、とこの教えを私たちに勧められる布教の道に入られました。他の修行と違いこの「行」

が優れているのは、いつでも、どこでも、また出家や在家、貴族や庶民、能力の別なく誰もが称えることのできる点にあります。その意味で、浄土真宗の「行」はとてもやさしいことがお分かりいただけでしょう。

### 信じるのが難しい、

お念仏の「行」は、このようにやさしいのですが、それを感じるのが難しいのです。それには二つの理由があると思います。

まず第一は、言葉の意味が理解できないからではないでしょうか。念仏って何なのだろう。さとりってなんだろうか。すぐわかるっていうけれどどうすればいい。念仏を称えようと、すぐわかるの。

とひとつひとつの意味がわからないのだと思います。確かに仏教になじんでおられない人は、言葉ひとつひとつが日常使っている言葉では

ないので、意味がわからないのではないのでしょうか。しかし、少し教えを学んで言葉の内容を理解すれば、誰もがわかるようになるものです。

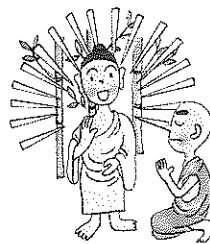
第二の理由は、先の教えにあった法蔵菩薩の話など「信じられない」、「受け入れられない」というからでしょう。

念仏を称えればさとりがひらけるということを言われても、法蔵菩薩の話は私たちにとって、おとぎ話のように聞こえるからです。

私たちはものごとを理解するには、自分で納得できたものを「理解した」というふうな経験に基づいた判断が基準となつています。だから、科学的なものや物証のあるものなど、客観的と思われるものを提示されれば、納得しやすいのです。ところが、念仏の教えは、科学的でも物証的でもありません。そのため理解しにくいのです。

ここで気づかなくてはいけないのは、お釈迦さまが説か

れた「仏説無量寿経」は「すべてのものを平等とみることでできる、人間の知恵をはるかに超えた崇高な仏の智慧から見えた世界を、私たちにわかりやすく説かれたもの」であるということです。



仏の智慧の世界のことは、人間の言葉ではとても説明できません。それを説明するために、私たちにとおとぎ話にしているのです。經典の内容を単におとぎ話として片付けるのは、私たちの傲慢なところのなせるわざです。そうではなく、お経の中に仏の願いが込められていることに気づき、謙虚にそれを学ぶ姿勢こそが、私たちに求められています。

親鸞聖人は「念仏を称えたものをさとりの国に生まれさせる」とした阿弥陀如来の本願の働きを、人間の知恵をは

るかに超えたものという意味で「不思議」といわれました。親鸞聖人のように人生をかけたさとりを極められようとした方が、最終的にこの教えを選んだのです。ですから、私たちは「不思議」なものについてあれこれ自分で判定する気持ちには捨てて、ただ「そうですか」と素直に聞けばよいのです。

「念仏を称えなさい」という仏の勧めを「そうですか」と聞き、うなずくことがとても大切な歩みになるのです。うなずくことができれば、仏の智慧を学ぶ姿勢があなたにもできたこととなります。

この一歩を踏み出すことができれば、あとはその教えを聞く（聴聞）ことを重ね、念仏を称える生活をしていくことで、いままでとは違った喜びの世界が見えてきます。そのとき、あなたも念仏者のひとりになり、いきているうちに仏の教えに出会ったということになれるのです。

（釈弘眞）

### 編集後記

▼立春が過ぎて雨水、啓蟄と春の息吹を感じながら、春分を迎えました。「彼岸」とは

仏さまの世界であるお浄土を指す言葉で、迷いのこの岸（此岸）から、さとりの彼の国（彼岸）へと渡ること「到彼岸」が元来の意味です。▼昼

夜の長さが等しい春分や秋分の中日には、太陽が真東からのぼり真西に沈みます。この日に夕陽を拝むと、お浄土の東門を拝むことになり、そこに生まれて行かれたご先祖を偲びつつ、お念仏を称えることが彼岸会です。また、十万

億土のあなたにあるという阿弥陀如来の極楽浄土が西にあることを教えてくれる「道しるべ」でもあるのです。▼彼岸を「あの世に行かれた先祖を供養する期間」と考えられる間違いです。あの世ではなく、お浄土へ導いて下さる阿弥陀如来のお徳と捉え、み心をお聞かせいただく仏縁とさせて

いただきます。よう。（高瀬）

（3） 願牛寺報 第5号



## 親鸞聖人御絵伝二幅〈第一場面〉



〔江戸時代・願牛寺所蔵〕

前号にてご紹介した願牛寺の法物である親鸞聖人の御絵伝の各場面について、解説いたします。今回は掛け軸二幅の右下の第一場面です。

この場面では、越後での流罪を解かれた親鸞聖人が関東行を決意された場面が3つの状況に分けて描かれています。日本の絵伝の特徴は、「異時同図法」といって、ひとつの場面の中に、同一人物が複数回登場して、その間の時間的推移を示す方法がとられることです。当寺の御絵伝でもこの手法がとられています。

第一場面の中には、親鸞聖人が3人登場しており、時間の推移がわかるようになっていきます。ちなみに、親鸞聖人は、黒衣に、首に白い襟巻のようなものを必ずつけた姿で描かれていますので、すぐに分かります。

時間の流れは左下から始ま

ります。これは、親鸞聖人が流された越後の流罪地の草庵でのお勤めの様子です。阿弥陀如来のお木像の前に、燭台、香炉、櫛を飾った三具足の前で経を誦読されているのが親鸞聖人です。ご随従のお弟子が2人おられますが、おひとは願牛寺にゆかりの深い下妻の蓮位坊と思われま

す。次は左上に場面は移ります。ここでは旅姿の僧3人が役人の前にいます。右から2番目が襟巻をした親鸞聖人です。越後での流罪が解かれ、役人の居る国府の前から、法然聖人の待たれていた京都へま

まに出発する場面です。最後は、右の場面です。山々に囲まれた碓氷峠での聖人一行が描かれています。京都へ向かっておられた親鸞聖人一行は、碓氷峠で法然聖人の随従の弟子だった勢観房源智からの手紙で、法然聖人の計

報を知った場面です。絵伝では、僧4人が描かれていて、親鸞聖人は手紙を広げられて読まれています。親鸞聖人の前には、京都から手紙を携えた使いが、また、親鸞聖人の右には、左上で、越後を出発した際の随従の弟子2人も描かれています。

手紙を読まれた親鸞聖人は、「法然聖人が亡くなられたうへは京都へ戻っても仕方がない、これからは東国の人々に阿弥陀如来のみ教えを伝えよう」と言われたのでした。その時、ご随従の蓮位坊が「それならば（蓮位坊の）いとこである下総国岡田郡の稲葉伊予守勝重のところへおいでください」と申し上げたところ、親鸞聖人はそれをたいそう喜ばれて、下総に向けて碓氷峠から出発されたということです。（次号へ続く）